静岡SPHニュースレター
SPH NEWS LETTER
静岡社会健康医学大学院大学
SHIZUOKA GRADUATE UNIVERSITY OF PUBLIC HEALTH
SHIZUOKA SPH ACTIONS vol.02 秋号 2024

本大学について

国際社会に貢献する「知と人材の拠点」へ

静岡SPH（School of Public Health）

本大学は、2021年に開学した社会健康医学を学べる大学院大学です。公衆衛生学の5領域を基盤とし医療ビッグデータ解析やゲノム医学、オーディオロジー（聴覚言語学）について学ぶことが可能で、県内の医師や看護師、また行政の保健師、管理栄養士などさまざまな職種の方が通っています。

直近の活動報告

HPVワクチン『キャッチアップ』接種 全国7大学と連携しセミナー実施

子宮頸がん予防の重要性を意見交流で学生に伝える

厚労省及び本学を中心とする全国7大学では、子宮頸がんを予防するヒトパピローマウイルス（HPV）ワクチンの「キャッチアップ接種」の認知拡大を目指し、周知キャンペーンを行いました。

1997年度から2007年度生まれの女性で、まだワクチンを受けていない方に対し、2025年3月まで、「キャッチアップ接種」として公費による接種の機会が提供されています。

厚労省参与でもある本学の溝田准教授が順次、全国7大学25キャンパス（千葉大学・全5キャンパス、東海大学・湘南キャンパス、静岡社会健康医学大学院大学、静岡理工科大学及びグループ校、近畿大学、奈良女子大学、山口県立大学）へ足を運び、セミナー等のキャンペーンを展開。学生の実際の反応を通してリアルな意見交流を深めるとともに、学食内の食事トレーや卓上のメニュー立てを告知スペースとして活用することで、より多くの学生が目にする機会を増やし認知度向上を図りました。

▲ポスターのほか
学食トレーやスタンドPOPを作成

今までにない「大学との連携」は、各種メディア（新聞・TV等）で大きく報道され、多くの方が目にする機会を創出することに成功しました。
◎令和6年7月19日（金）静岡新聞（朝刊）26面（社会面）▶
◎令和6年7月27日（土）読売新聞（朝刊）　◎共同通信
◎NHK（全国）◎NHK静岡 ◎NHK奈良支局　他多数

溝田准教授から伝えたいこと

誰にでも平等にある“知る権利”を守りたい

キャンペーンの背景には、対象者の半数がHPVワクチンのキャッチアップ接種を知らないと事前調査で判明したことがあり、知らないまま接種期間を終えることがないよう周知活動を展開し、より多くの対象の方への周知に繋げることを目的に、メディアを通じた報道が広がるよう計画しました。

セミナー後には個別に相談があり、男子学生からも質問があるなど多くの反響がありました。

静岡社会健康医学大学院大学
准教授（健康社会学、健康教育学、行動科学）、博士（保健学）
厚生労働省参与 **溝田 友里** 准教授

【発行】静岡社会健康医学大学院大学　社会健康医学研究センター

在校生紹介

修士課程卒・博士課程2年

市川 義一さん

［主な研究内容］子宮頸がん予防行動を促す手法の開発など
［指導教官］山本精一郎教授、溝田友里准教授

正しい知識をもって子宮頸がんを予防できる社会へ

静岡赤十字病院の副院長兼産婦人科部長の市川さん。医師として現場に立つ中で、より最適な治療や予防を行いたいという思いから公衆衛生大学院大学への入学を検討していたのだとか。静岡SPHの設立を知り、「自分のための学校だ」と感じたそうです。

市川さんに聞いてみました!

Q.静岡SPHに入学した理由は?
A.私は、婦人科腫瘍学を専門として腹腔鏡などを用いて患者さんの負担が少ない治療を目指してきました。患者さんの不安や苦痛と向き合う中で、子宮頸がん予防に関するエビデンスと実際の社会における行動が繋がっていないことに問題を感じ、集団にとっての正しい情報を理解し、行動変容へと繋げていく方法を学びたいと考え、入学しました。

Q.静岡SPHに入学してよかった点を教えてください。
A.行動科学の観点から女性の子宮頸がん予防行動を促す手法を研究する中で、行動の障壁や、言葉の選び方、情報を伝える順番などを考え、介入と科学的評価に繋げる考え方を学びました。講義では、臨床医学以外のさまざまな視点を学べたことが大きなメリットです。

Q.仕事と学業の両立するために工夫したことはありますか?
A.時間を作るために帰宅後はできるだけ早寝をして、早朝に起きて勉強をするのが習慣になりました。朝は静かで集中でき、アイデアも浮かびやすいので研究にうってつけの時間帯ですね。

Q.今後の目標についてお聞かせください。
A.2022年から、日本でもHPVワクチンの積極的な接種勧奨が再開しましたが、HPVワクチン忌避の風潮は社会全体に浸透しています。子宮頸がんやHPVワクチンは女性だけの問題ではありません。本学での学びを研究だけに終わらせず、誰もが正しい知識をもち、自然と予防したいと思える社会づくりに貢献していきたいです。

お知らせ

2024年8月～

静岡社会健康医学大学院大学では 2024年度 オープンキャンパス・オンライン説明会を開催しました。

8月のオープンキャンパスの様子

2024年8月3日、学内にてオープンキャンパスを開催しました。当日は医師、理学療法士、薬剤師、看護師、公務員など多様な職種の方が参加しました。大学概要説明やキャンパス見学、在学生との懇談会、教員への個別相談が行われ、仕事との両立や課題の量、医療職以外でも授業についていけるかなど、参加者から質問が飛び交いました。今年度は10月までオンライン説明会を実施していますので、ぜひご参加ください。

今後の開催予定	◎ 9月28日（土）オンライン説明会〈修士課程（2年制）〉 ◎10月18日（金）オンライン説明会〈博士課程（3年制）〉

オープンキャンパス・オンライン説明会情報
詳細はこちらから→

現在実施中の研究紹介

県の地域特性に合わせて健診データを収集・分析し生活習慣と疾病の発症との関連性を解明

≫ 静岡多目的コホート研究事業

県内初 約5年ごとの大規模コホート調査※を実施予定

県内の各自治体と協力して健康づくり・予防医学研究事業を展開しています。おおむね5年を目安に充実した健診を行い、健康づくりを直接支援するとともに、得られた健診データを研究に活用して新しい病気の予防方法を開発するコホート調査を実施予定。静岡県を伊豆、東部、中部、西部とエリア分けし、研究対象として伊豆から賀茂地区、西部から袋井市を選出しました。賀茂地区では「かもけん!」、袋井市では「ふくけん!」と、親しみやすい名称をつけ、気軽に参加できる工夫を取り入れているのが特徴の一つです。

※コホート調査とは…ある集団を長期間追跡して、病気の発生などの健康状態の変化を調べる研究のことです。

◎令和5年度開始　袋井市「ふくけん!」

ふく研 FUKUKEN

◎令和3年度開始　賀茂地区「かもけん!」

かも研 KAMOKEN

◎しずおか研究（静岡多目的コホート研究事業）

The SHIZUOKA STUDY しずおか研究

静岡SPHが中心となり、県内外の大学や研究機関、企業、自治体と連携して行う。

県民の健康づくりや病気予防を目指して地域特性に合わせた健診内容を実施

■静岡県内の収縮期血圧平均値による格差（過去6.5年間分）N=594,799人

性別・年齢・BMI値調整済み

県西部と県東部の格差が大きい

■最も低い ■やや低い ■普通 ■やや高い ■最も高い

静岡県国民健康保険特定健診データより

通常の健康診断に加え下記の特別な検査を行います

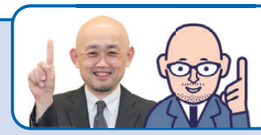
家庭血圧　咀しゃく力　蓄尿検査　記憶力　筋肉量　頭部MRI　等

検診だけでなく、血圧計の貸し出しや減塩の啓発活動など、健康づくりを始める機会の提供にも注力している。

↑令和6年2月に行われた「ふくけん!」の様子。様々な検査が1日で受けられる。

➡ 次号、「コホート研究」について特集します。ぜひご覧ください!

担当教授による研究解説



静岡県のコホート研究は世界からも注目され始めています!

コホート研究の進化が日本人の健康を支える

コホート研究は、社会のインフラと同じくらい重要です。日本人の健康を守るには、外国のデータに頼らず、自国民のデータを集めて分析する必要があります。その点で、賀茂地区や袋井市でのデータ収集は大きな意味をもちます。

今後の研究では、特定の家庭に1年分の減塩食品を配布し、その効果を検証するプロジェクトを進める予定です。減塩食品は健康改善に不可欠であり、使用体験を通じて結果を共有できれば、社会全体への普及に繋げることを目的に取り組んでいます。

また、ナトリウムやカリウムを簡単に測定できるデバイスも活用し、食塩摂取や野菜の摂取に対する意識を高める取り組みも計画中です。こうしたエビデンスに基づいた活動を社会に導入し、地域の健康向上に貢献したいと考えています。

静岡社会健康医学大学院大学 社会健康医学研究科 教授／研究科長
京都大学 大学院医学研究科先端・国際医学講座 客員教授
大阪大学 大学院医学系研究科 総合ヘルスプロモーション科学講座 招へい教授

博士（医学）
田原 康玄 教授

研究成果の紹介

新型コロナウイルス感染症の高齢者施設等での発生状況の分析

県と連携してコロナ感染データを詳細に分析 集団感染予防の新たな一歩へ

2022年1月から2023年5月までに報告された高齢者施設の新型コロナ感染事例28,192件を基に、施設ごとの感染状況を詳細に分析。静岡県健康福祉部と連携し、施設定員や職員の定期検査状況などのデータを組み合わせ、集団感染の予防策を検討しています。この分析結果は、今後の静岡県における感染症対策の基礎資料として活用されています。

〈 研究方法 〉

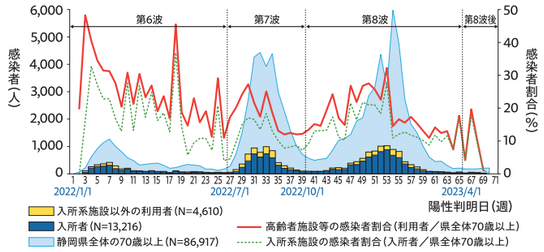
発生報告 N=28,192（2022.1.1～2023.5.7）
［報告データ］
・感染判明日
・利用者（入所者）／職員の別
・施設・事業所の名称、所在市町名、サービス区分

既存データ（静岡県からの提供）
・施設の定員
・施設職員への定期検査実施の有無
・施設への訪問指導実施の有無

→ 施設・事業所別データセット N=2,818 → 分析結果

高齢者施設では市中よりも感染を抑制

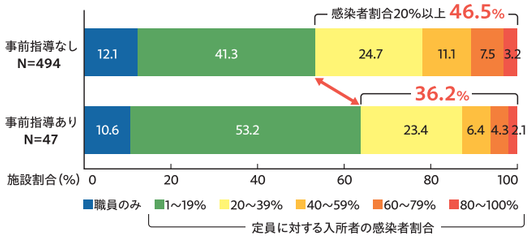
■1週間ごとの感染者数の推移



1週間ごとに県全体の70歳以上感染者と高齢者施設等での感染者数を比較したところ、**高齢者施設等では感染期を経るごとに感染を抑制できている**ことがわかりました。施設職員の経験値に伴い対策力がついたこと、実施してきた感染防止の取組に効果があったことが示唆されます。また、県が施設に対して感染防止のための事前訪問指導を実施した結果、感染者割合は20%以上の施設が減少。**事前訪問指導が感染拡大の抑制に効果的である**ことも判明しました。

事前訪問指導が感染拡大の抑制に効果的

■事前訪問指導の有無による第8波の感染状況の違い



本学の講師紹介

本学は全国でも珍しい「医療ケア組織論」を学べる場。持続的かつ効果的な組織の在り方を考える講義を受けられるのも魅力の一つです。

静岡社会健康医学大学院大学
佐々木八十子 講師

博士（社会健康医学）
前職では国立成育医療研究センターにて母子保健の疫学臨床研究に従事。
本学では、組織的なアプローチから医療やケアの質を高めるための研究等を行う。

組織分析を通じて医療やケアの質の向上を目指す

医療チームの組織分析を通じてケアの質を向上させる研究を進めています。医療現場では、チーム内のコミュニケーションや組織文化が診療やケアの質に大きな影響を与えます。そこで、各病院などで医療スタッフの方々にチーム人数や経験年数を含めた体制のほか、組織の風土や文化なども質問票で回答していただき、分析した結果をフィードバックして、より機能的なチームの在り方を議論により見つけ出していく取り組みを行います。チームワークとコミュニケーションが良好であればあるほどチームがよく機能し、より良いパフォーマンスを発揮できるため、治療やケアの質の向上に繋がる成果が報告されています。

高齢者施設のコロナ感染状況の分析では、施設定員やサービス区分など組織的な情報と感染状況との関連を検討しました。分析結果をもとに、5類感染症「移行前」と「移行後」の感染対策について、各施設に質問票調査を行う予定です。

今後も研究を通じて医療ケアの水準の引き上げに貢献していきます。